初老時代

小城ゆり子

（１）直葬

辞書を引くと、初老とは、（１）四十歳　（２）老年期の始まり　という意味だそうだ。四十歳で初老とは。現在は、寿命が延びているから、六十歳で初老、ということにしてもらおう。それでも、私はもう六八歳だから、初老ではなく、純然たる高齢者か。でも、さびしいので、今を初老の時代にしてもらおう。その今のわが家やわが一族の風景を書いてみよう。

（１）直葬

直葬というのは、死者の葬式をしないで火葬場に直行して弔うことをいう。最近多いそうだ。（「池上彰の宗教がわかれば世界が見える」による）
わが夫の一族では義兄、橋川徳四郎の弔いがそうだった。

徳四郎は変わり者だった。一生結婚もせず、兄弟ともまじわらず、一人で暮していた。私が夫、橋川正造と結婚したときも、一族を取り仕切っていた長兄が「正造が再婚だから、身内だけを招くことにして」と言って、兄姉たちだけを招いたが、結婚式では何か一人足りないようで……後でわかったことだが、徳四郎を招かなかったのだ。その後、何度か法事や兄弟の集まりがあったが、徳四郎は出席しているのに、一人離れていた。私は徳四郎を紹介してもらえなかった。他の兄姉たちはちゃんと紹介してもらえるのに、と、私はいつも、不思議に思っていた。徳四郎は、兄弟の仲でも疎外されていた。長い時間の経過の中で、そうわかってきたことだったが。夫の兄姉は全部で八人、夫は九人兄弟の末っ子である。仲の良い兄弟であるが、徳四郎だけは特別扱いであった。義母の法事の際に夫の撮った写真をそれぞれ、義兄、義姉に送っていたのだが、徳四郎の分はどこへ送ればいいのかわからなかった。住所を知らされていなかった。夫に聞くと、「池袋の兄さんのところに一緒に送ればいい」と言う。夫も実の兄、徳四郎の住所を知らないらしかった。
池袋の兄さんというのは、長兄で、以前、池袋で家具商をしていた。九人兄弟の元締めである。そこへ徳四郎の分も送ったら、兄嫁から、「まあ、ごていねいに、徳ちゃんの分まで送っていただいて」と礼状が来た。兄嫁は面倒見の良い人だった。若い頃は同居している徳四郎が何と兄嫁である彼女に暴力を振るうこともあったのに、彼に分譲マンションの一室を買ってやったりした。暴力を振るわれるのが嫌で、マンションを買ってやって別居させたのかもしれないが……。
兄弟は皆で共同して家具商をしていたのだが、兄弟全部年をとってしまい、跡取りもなく、不況で商売をやっていけないということもあって、十五年前に店を閉じた。徳四郎も、国民年金で暮らす身となった。彼は金など使わない。質素に暮らして、不自由もなかった。結婚しなかったから、現役のときも金の使い道がなく、貯金も多かったのかもしれない。健康面ではどうだっただろう？　別に病気とか、どこか悪いとか、兄弟にも言わなかったようだ。彼は、何も言わずに死んだ。

この年(二〇一一年)の五月、長兄から電話がかかってきた。
「徳ちゃんが死んだんだよ」
「えっ？」

「警察から電話があってね、マンションで、もう一月も前に亡くなっていたんだって。誰も知らなかったが、マンションの人がおかしいと思って警察に届けたんだな。警察から呼び出しが来たので、ぼくはこれから行ってくる」
「そうですか。ご苦労様です」
　これまでも兄弟のもめごとは、皆、この長兄が引き受けてきた。

　警察の監察医は、死体を調べてくれたが、四月上旬頃病死したというだけで、病名もわからなかった。事件性はないということで、遺体はすぐに葬儀社に引き渡してくれた。「明日、火葬するんだ」ということで、夫と私はその日、火葬場に行った。長兄夫婦とその息子、孫息子の四人、次兄、それに私たち夫婦の七人で徳四郎を見送った。簡単に直葬したのに、長兄は葬儀社に三十万円も払ったらしい。
「兄弟だけでも集まって見送ってあげたら」と私が言うと、長兄は、「納骨のときにはちゃんとやるよ」という答えだった。

　川口市内にある徳四郎のマンションの後始末は、夫が引き受けた。
「もう部屋中、めちゃめちゃなんだよ。畳は汚れているし、窓ガラスは割れているし、洋服も何もかもそこいらじゅうに散らばっていて。ぼくは、散らばっている座布団の下から、金を見つけた」と夫は汚い小銭をいっぱい見せる。「小銭はこうだけれど、百万円の束が三つ、ごみごみしたところから見つかったよ。警察も、貯金通帳などは見つけたが、ゴミの中に三百万円もあるとは思わなかったんだな、見過ごしてしまったらしい」
　貯金通帳その他の書類は、警察が押収して、長兄に渡した。
「この金は、姉さんが亡くなったとき、遺産相続で、ぼくが兄さんたちに分けて渡し、徳ちゃんの分は池袋の兄さんに託した金だな。徳ちゃんは、兄さんからもらっただけで、使いもせず、その辺にほおっておいたんだな。ぼくは、この中から二百万円分を池袋に渡し、あとは自分で持って来た。マンションの掃除や当座の費用に使おう」
　一応、その百万円は夫の貯金通帳に入金する。
　徳四郎の貯金通帳に残っていた分は、七百万円ほど。彼は国民年金で暮らしていたはずなのに、お金は使わなかったらしい。夫が銀行とかけあって、遺産相続の書類をもらってきた。今生きている兄姉が四人、あと子供を遺して亡くなった義兄が二人いる。先に亡くなった義姉には、子供がいない。子供がいなかったから、義姉の遺産は兄弟で分けたのだ。で、徳四郎の遺産も、生きている者たちに百万円ずつ分けてあげられる。
「納骨の日に、皆から印鑑をもらおう」と決めて、皆に連絡する。「納骨の日に、実印と印鑑証明書と戸籍謄本を持ってきてくれ」
　遺産相続は、わずかなお金でも、ややこしいのだ。亡くなった義姉の除籍謄本も取り寄せて、彼女に子供がいないということを証明しなければならない。
　三番目の義兄は、若いときに亡くなって、息子が二人いる。それぞれ一家を成しているが、この二人にも相続権がある。徳四郎のことなど、そういう人がいるということも何も知らない甥たちであるが、血のつながりがある以上、相続人から外すわけにいかない。この甥たちは、徳四郎の納骨には来ない。
「ま、いいや、ぼくが後でこの子たちに会って、判子をもらおう。わずかでもお金がもらえるんだから、判子を捺してくれるだろう」
「相続っておもしろいわね。何も知らなかった人から、遺産がもらえるなんて」

「そうだよなあ。血のつながりって、そういうものなんだな」

　納骨は、浅草の橋川家菩提寺でやった。長兄の所有するお墓だが、先に亡くなった三兄のお骨も、その兄嫁のお骨も入っている。次々と兄弟たちが入るので、池袋の兄嫁は、「私たちの入るところがなくなる」と心配している。心配しなくても、地下に入るところはいっぱいあるそうだ。この橋川家累代の墓は、お寺の本堂の地下室にある墓地にある。そこに、徳四郎のお骨も入れた。
　兄弟全部集まって、住職にお経をあげてもらった。
　兄姉に遺産相続の書類に署名捺印してもらう。皆、年をとっているので、書類に文字を書くのも目が不自由で大変だった。「ほら、ここに署名して」と夫がいちいち指示していた。
　法事の食事。若い住職は私の夫と同じ仏教系の高校を出たという。しばし、同窓会の話に花が咲く。せっかく兄姉が集まっているのに、夫はそれには淡々としている。
　のろまの次兄がゆっくりとご飯を食べている。長兄が見かねて言う。「達ちゃん、みんな、君が食べ終わるのを待っているんだよ」
　次兄はそそくさと食事を終える。それから皆、写真を撮って、家路につく。
　兄弟は皆、首都圏に住んでいても、会うのは葬式や法事のときだけである。

　銀行がああでもない、こうでもない、と言ってなかなか預貯金の相続がはかどらない。人は必ず死ぬのだから、預貯金の相続などいつもあることだろうに、銀行員が必要な手続きをよくわかっていない。夫がぶつぶつ文句を言っていた。無駄足を運ばされることもあった。それでも、なんとか預貯金は片付いた。
　問題は川口市内にある徳四郎名義のマンションである。ぼろぼろに使い古したマンションの一室。リフォームして売るか、あるいはこのまま捨て値で売るか。第一、いったい誰が相続するのか。夫が義兄たちに聞いてみると、皆、いらないと言う。住むにはいらないし、相続して売るのは面倒だし。結局、夫が相続することになった。
　夫が川口まで日参して、掃除や片づけをする。小さいものは棄てて、大きいものは業者に頼んだ。「ここは百五十万円でいいよ」と夫が言ったら、片付けに来た業者の学生アルバイトが、「社長が買いたいと言っています」と言う。学生アルバイトは、そこを社長に寮にしてもらって、自分が住みたかったのだろう。何しろ駅からすぐ近くのマンションなのだ。彼は随分熱心だったが、待てど暮らせど社長からの連絡はなかった。
　それで、駅前の不動産業者に頼んだのだが、登記簿に「四月一日から十日までの間に相続が発生した」とあるのがひっかかった。徳四郎が四月一日から十日までの間に死んだことは確かだが、その間のいつ、何日に死んだか、はっきりしない。だから人が不審に思う。自殺？　孤独死？　そういう物件は、人が買いたがらない。結局、夫のゴルフ仲間の不動産業者が、斡旋してくれ、近くの会社が社宅にするために買ってくれた。会社がマンションの一室を買ってそこを社宅にするのはよくあることである。夫はリフォームなしの捨て値で売った。池袋の兄嫁が徳四郎に買ってやったときは、一千万円もしたのだそうだが。
　徳四郎の一生はいったい何だったのだろう？　結婚もせず……一度も女出入りがなかったのだろうか？
　つましい生活をして、決して金持ちであったはずはないのに、兄弟に遺産を遺した。金の使い方も知らなかった。彼が人生でいったい何を生きがいにしていたか、誰もわかろうとしなかった。

（２）ゴミ屋敷ならぬ着物屋敷

夫の八人の兄姉のうち、いままで池袋の長兄が兄弟の元締めをやってきた。父母の残した家具商を他の義兄たちと経営し、橋川ビルを運営して来た。橋川ビルは、もう古いビルで、義兄たちは一階で家具商を開き、二階、三階、四階を他の事務所に貸し、五階を住居にしてきた。長兄は、一人息子の彰浩が結婚したときは、屋上に部屋を作ってやった。家具商のあがりとビルの家賃で生活してきたのだ。

五人の義兄たちが家具商を運営してきたのだが、商品は事務用の家具が主で、景気の良いときはそれなりにもうかったが、近年、世の中の景気が悪く、事務所を閉める会社ばかりで、中古の家具を買ってくれという注文だけで、売れない。新しい事務所を開く会社がほとんどないのだ。五人の義兄たちも年をとり、家具を運ぶのも重労働になった。加えて、長兄の一人息子の彰浩は家を継がない。数年前、義兄たちはとうとう店を廃業した。今は一階も人に貸し、ビルの家賃だけで暮らしている。

彰浩は家を継ぐ気もないのに、大学卒業後、就職しなかった。「店の長男だからいずれは後を継ぐのだろうと思われて、どこの会社も採用してくれないんだ」と夫は言っていた。で、歌や踊りの好きな彰浩は、ジャズダンスの道に進み、ジャズダンスの公演もしていたが、今はダンスの教師をしている。長兄に言わせると、「彰浩は、一般の人に教えているのではなく、ダンスの教師たちに教えているのだ」そうである。この長兄は息子の学歴も自慢しているが、近年は不景気で、ダンスを習う人などほとんどいなくて、彰浩は無収入で、アルバイトで食いつないでいる。彼ももういい年で、三人も大きな子供がいる。長男、次男、長女と三人いるのだが、この子たちがまた問題なのだ。現在高校生の長女だけは問題がない。長男は、もう二十歳をとうに越えているのに、高校で不登校になったまま、通信制高校に移ったが、そこも卒業していない。就職するでもなく、家でぶらぶらしている。次男も高校で不登校になり、ひきこもりになった。家に閉じこもって、精神科の治療も受けていない。

「孫のことが心配なんだよ」と長兄はこぼす。「心配で、ぼくは死ねないんだ」

今ははビルのあがりがあるから、なんとか家族で暮らしていける。長兄が亡くなったら、どうするか。建物は橋川建物という会社になっているし、株券はもう彰浩夫妻にゆずってあるから、相続税の心配はない。土地は地主から借りているものだが、東京の一等地だから、借地権の価格も高いそうだ。借地権を売ったら、彰浩たちもその金で暮らしていけるだろう。だが、この住居、ビルの五階、一つ問題をかかえている。兄嫁の着物が部屋中占領し、足の踏み場もないのだ。

私は、結婚後、池袋の家を何度か訪れたが、その頃は、この家も普通だった。今は。ゴミ屋敷ならぬ着物屋敷であるらしい。「らしい」と言うのは私が自分で見たわけではなく、夫が行って、あきれて帰ってくるのである。兄嫁が各種の着物を買い込み、家中、着物の山なのだ。

なぜ兄嫁は着物をどっさり買い込んだのか。だいたい、彼女は、着物など着ない人なのだ。私の結婚式の日もドレスを着て来たし、その後、法事のときも、兄弟の集まりのときも、甥たちの結婚式のときも、ロングドレスであった。葬儀のときもそうだ。私は彼女が着物を着ているのを見たことがない。彼女は、着物の着付け方も知らないのではないかと思われる。いや、民謡踊りをやっていたから、着付け方も一応は知っているのだろう。それなら、着てくればいいのに。着なくても、兄嫁は着物をどっさり持っている。着物の業者が、着物を買うと京都や北海道へ旅行に招待してくれる。宮沢りえのワンマンショーにも招待してくれる。それがお目当てで、彼女は着物を次々と買ったのだ。長兄は乗り物酔い

がひどく、ほとんどどこへも旅行したことがない。彼が妻をどこへも連れて行ってやらないから、妻は欲求不満で着物業者にだまされるのだ。

着物を買うのはかまわない。だが、買った着物が一山も二山も三山もあって、家中着物だらけで、人の居る場所がないとなると、これは大問題である。仏壇の間などは、着物でいっぱいぎっしりで、戸を開けることすらできないそうだ。そして、ごきぶりが跋扈している。夫が池袋へ行っても、座る場所がない。だから、長兄は、来るときは来ると予告してほしい、そうしたら座る場所くらいゴミの山をちょちょっとかたづけて、座布団の場所くらい作っておくから、と言っている。

兄嫁は、十年前に大腸癌の手術を受けた。その後、膵臓に腫瘍が四個あるといわれているが、これらは癌ではないそうだ。もともと糖尿病もある。若い頃から、あすこが悪い、ここが悪い、と病院通いしていた兄嫁なのだ。今は、年も年で、寝てばかりで、家事もできない。かろうじて洗濯はしているそうだが。食事は、朝はパン一枚で、夕食は近所の寿司店で夕方七時になると散らし寿司弁当が一個五百円になるので、毎日、それを買って食べているそうだ。兄嫁は寝たきりで、トイレもままならない。長兄は、片目が見えず、耳もよく聞こえない。心臓の病気もあるようだ。

しかし、私が「義兄(おにい)さんも、義姉(おねえ)さんも、介護認定をお受けになったら？」と勧めても、「介護認定を受けて、ヘルパーさんに来てもらうことになっても、うちは荷物が多くて、ヘルパーさんのいる所がないんだよ」となる。

「荷物は棄てればいいじゃないですか」

「それが、棄てられないんだよ。家内もそうだし、ぼく自身も棄てられないんだ。ゴミでも棄てるのは嫌いなんだ」

「そんな……これからどうするつもりです？　介護ベッドも入れられないし、病気になってもすぐには死ねませんよ。やはりヘルパーさんの助けを借りないと」

「荷物を棄てられないんだよ」

「着物をそんなに持っていて、これから何十年生きるつもりなんですか？」

「孫にあげられないかな」

「そんな、若い人はそんなもの喜びませんよ」

とにかくこの夫婦は、ゴミも着物の山も棄てられない。介護保険料は払っても、介護認定は受けられない。着たこともない着物の山に埋もれて、死ぬのだろう。後は彰浩が全部棄てるだろう。

(3)2011年の年末

二〇一一年は東日本大震災の年だった。多くの命が失われ、地震、津波の他、原発事故まであり、日本は未曾有の国難に見舞われた。世界に目を向けても、ユーロ危機、アラブの春と続き、年末には北朝鮮の独裁者・金正日が亡くなった。北朝鮮はこれからどうなるのか、世界はどうなるのか、未知数である。

わが家では年末になると、物が壊れる。いつものことなのだ。といっても、そんなことは忘れていたのだが、小説教室に提出する作品を、六三枚×九人分、五六七枚印刷していたら、プリンタが壊れた。壊れたといっても、まだ印刷できるのだが、「プリンタ内部の部品調整の時期が近づいています」というエラーメッセージが出てきたのだ。プリンタの会社、Ｅ社に電話すると、修理が必要だが、年内には無理、という。修理代は五七〇〇円か場合によっては一万円ほどかかるという。一万円出せば新しいプリンタが買えるではないか。そう言ったら、Ｅ社の担当者はサービスショップの電話番号を教えてくれた。これは、去年の暮れにも壊れたのだ。そのときは、インクが少なくなったので、インクを入れ替えたのに、インク切れのメッセージが出たのだ。新しいインクをちゃんと入れたのに。Ｅ社の担当者は、電源を入れなおしてみればいいという。何度も電源を入れなおして、やっとエラーメッセージが消えた。インクを入れ替える度にこんな目にあうのかと思ったが、インクが完全になくなってから入れ替えることにしたら、エラーメッセージが出なくなった。このときはこれで済んだ。しかし、また……。

考えてみれば、プリンタにも寿命というものがあったのだ。十円コピーで五六七枚すれば五六七〇円、それならコピー店に行く手間も省いて、プリンタですべて印刷すれば安上がり、と思ったのだが、そうは問屋がおろさなかった。もっとも、このプリンタを買ってから、もう数年たち、何千枚も何万枚も印刷してきたのだが。

ところで、新しいプリンタを買わなければならないのだろうか。今のままでは、いつ機械がストップするかわからない。Ｅ社の担当者によると、ストップするのは一月後か六年後かわからないそうだ。小説教室に出す分は、すべて印刷済みだが。

息子に電話で相談したら、プリンタは、Ｅ社よりもＣ社の物のほうが印刷の速度が速くていいそうだ。新年になったら、夫と電器店に行ってみるか。

十二月十七日、夫が人間ドッグに行った。その結果、胃カメラで問題があるのがわかった。モニターテレビの画面に胃に白いポリープみたいなのが見えたので、あ、やばいなあ、と思ったら、案の定、医師がそのポリープを取り、検査にまわすと言ったそうだ。

夫は胃癌なのだろうか？

「で、いつその結果はわかるの？」

「年明け」

「年明けって、いつ？」

「わからない」

医療機関の年末年始の休みが終わったら、いつ結果がわかるのか聞いてみようか。夫がいないときに聞いてみよう。

年賀状を書く。毎年、夫の分も私が表書きを書いているのだ。裏書きは干支の印刷をしてもらってあるから、何も書かなくてもいいのだが、余白に一言書き添えたほうがいいではないか。毎年、私は自分の分は、すべて一言書き添え、夫にも何か書くように勧めていた。が、これまで夫は何も書かなかった。無愛想な年賀状である。ところが、今年は、「ほら、何か書いたら？」と勧めたら、夫は一枚一枚、

ていねいに書き始めた。「健康に気をつける年になりました」とか、書いている。そして彼は何も言わないけれど、胃のポリープを気にしているのがわかる。私も夫のそれが気になってしようがない。それがストレスになっているのか、私も血圧が高くなったまま、下がらない。もともと高血圧で、最近それがひどく、診療所から二種類も降圧剤をもらってあるのに、二種類飲んでも、下がらない。また診療所に行こうかとも思ったが、精神的なものなら内科的には治らないだろうし、これ以上薬をもらうのもためらわれ、年明けの一月十二日に診察を予約してあるので、それまで様子を見ることにした。

ストレス性の高血圧……実はもう一つ、ストレスがあるのだ。

それは、飛行機。

私たちは、十二月二六日から二八日まで、二泊三日で四国へ行く旅行を計画していた。羽田から高松まで飛行機で往復する。飛行機に乗るのは私は初めてだった。で、自分が率先して計画した旅行なのに、私は飛行機が心配で心配でしかたがない。飛行機事故とか、ハイジャックとか。限りなく不安なのだ。私は双極性障害が落ち着いて十年ほどたつ。激しい症状は治まったが、まだ不安と強迫観念とが残っていて、ときどき、それらが顔を出す。そんなときには抗不安薬を飲むよう、指示されているのだが、このところそれもおさまっていてその薬のお世話にもならずにいた。しかし、今は不安でたまらないので、その薬を飲む。薬を飲めば、一時的に不安はおさまる。旅行にもふだんの薬の他、抗不安薬も忘れずに持っていく。抗不安薬の効果か、高血圧は一時的にだがおさまった。

十二月二六日早朝、早起きして夫と二人、駅まで歩いて行く。早朝なので、バスはないのだ。快速電車の一番早いのに乗って、新橋まで行く。そこから浜松町へ、そして東京モノレールで羽田空港へ。いよいよ飛行機だ。飛行機は乗ってみれば心配いらなかった。窓際の席なので、雲の上を飛んでいるのがよくわかった。そして瀬戸内海上空へ。やがて陸地が見えて、ほっとした。高松まで一時間とちょっと。あっという間だった。

さてその四国旅行だが、一番初めが金比羅宮。何百段もの石段を登る元気はなく、途中でダウンした。

四国の山奥、吉野川の上流では雪が降っていた。寒くはなかったが。奥道後温泉に泊まって、夕食も朝食もバイキング形式であった。

二日目は内子の白壁土蔵の町並みを散策し、四万十川を遊覧船で見物した。泊まりはあしずり温泉郷。ここは食事は日本食で、良かった。

三日目は、足摺岬でジョン万次郎像を見、桂浜で坂本竜馬像を見た。三日間観光バスで移動したのだが、バスを降りて歩いて見物する時間も長く、疲れてしまった。高松空港から羽田へ。羽田ですぐモノレールに乗れ、浜松町ですぐ山手線に乗れ、新橋ですぐ総武線快速に乗れ、稲毛駅ですぐにバスに乗れた。帰り着いたのは十時過ぎだったが、時間のロスがなく、運が良かった。四国から千葉に帰ってきたら、千葉が寒くて、大変だった。いつもは千葉は暖かいと思っていたのだ。

二九日、生協が来る。いつもはうちは月曜日配達なのだが、月曜日の二六日が旅行で不在なので、木曜日の二九日に来てもらったのだ。年末のため、特別配達だった。だが、「葉菜類はもちませんでしたので」と言ってそれらは持ってこなかった。で、野菜が不足しているので、午後、近くのスーパーに野菜を買いに行った。

三十日、テレビのＢＳアンテナが壊れた。地上デジタルは見えるのだが、ＢＳ放送が見られない。少し前、三階の田中氏が階段掃除で水を撒き、アンテナに水がかかってテレビが全く見られなかった。全く田中氏は余計なことをする、と怒ったのだが、今度は田中氏も誰も水を撒いていない。うちは団地の四階建て集合住宅の一階である。共用アンテナは屋上にある。アンテナの故障は、管理組合に連絡すればいいのだが、あいにく管理組合も年末年始の休みである。こまって、組合の副理事長に電話した。

「アンテナの会社も休みでしょうか？」
「さあ。連絡してみます」とのこと。アンテナの会社員は、午後来てくれて、テレビ受信は直った。全く、年末になると、機械が壊れるのだ。
　機械のみならず、夫まで壊れた。
　三一日、朝、嘔吐して、下痢もして、お腹が痛いという。
「昨日食べた鮭かしら？」
　昨日は、生協の持って来たマグロの刺身が少なかったので、それは二人で分けて食べ、夫にだけ鮭を焼いて出したのだ。あと、ほうれん草とか大根とかで食あたりも考えられない。冷凍庫に保存してあった鮭が痛んでいたのだろうか。塩鮭で食あたりもしないかもしれないが、気になったので、残りの鮭は棄てる。
　しかし、お昼ごろになって、夫は元気なく、「風邪をひいたのかなあ」とつぶやく。昨日、ベランダの大掃除をしてくれたので、冷たい風に吹かれたのかもしれない。
「ノロウィルスかしらね」
「ドラッグストアへ行って、薬を買ってきてくれないか」
「なんという薬がいいのかしら」
「さあ。聞いてみれば。名古屋に聞いてみればどうだ？」
　名古屋の姉は、薬剤師の免許を持っている。といっても今は専業主婦だが、義兄も薬剤師だから、薬のことは知っているだろう。名古屋に電話して相談する。
「あんたねえ、休日診療所に行きなさいよ。ノロウィルスかどうかわからないのに、買薬で済まそうなんて」
「胃にポリープがあるのと関係あるのかしら？」
「さあ、わからないわねえ。とにかく、お医者さんに行きなさい」
　姉が強くそう言うので、夫をせかす。
「休日急病診療所というのがあるから、保険証とお金を持って、そこへ車を運転して行きなさいよ。休日救急診療所は、この近くの、千葉みなとのそばの医療センターの中にあるから。ほら、とにかく、車を運転して行きなさい」
　うるさく言ったら、夫は、重い腰をあげた。彼が出かけてから、私は車の事故が心配になってきた。身体の調子の悪い夫が、交通事故を起こしたらどうしよう。なんで私は「車を運転して行きなさい」などと言ったのか。なんで「タクシーで行きなさい」と言わなかったのか。後悔先に立たずであった。しかし、夫は程なく、事故もなく、帰ってきた。お腹の薬を三種類ももらって来た。薬を飲んで、落ち着いたようだ。
　大晦日は、池上彰氏の「そうだったのか　学べるニュース・スペシャル」を見る。うちはあまのじゃくだから、紅白歌合戦などは見ないのだ。池上さんのは面白いが、眠いので、ビデオに撮って、十一時に寝ようとしたら……。
　玄関のファクシミリ電話機を見たら、「カバーがあいています。カバーを閉めてください」というエラーメッセージが出ている。カバーは閉まっているのにと思って、閉めなおしてみたが、なおもエラーメッセージが出る。何度閉めなおしても、しつこく出る。どうやってもだめ。これで電話できるのか調べてみたいが、何せ今は深夜である。人に電話して迷惑はかけられない。しかたなく、自分の番号に電話したら、お話中になったので、電話はかけられそうだ。それにしても、これをなんとかしたいが、夫はもう寝ているし……大晦日の晩に機械が壊れた。なぜこうも何でも壊れるのか。年の暮れは物が壊れる。新年になったら、もう壊れないのだろうか。早く新年にならないか。もう寝よう。

（４）２０１２年の新春

　年が明けた。元旦、例年の通り、おせちとお雑煮を食べて、近くの神社に初詣に行く。私は信心がないので、お賽銭は十円しかあげなかった。それでも、千円の干支の置物を買う。売り子の巫女が、「割れ物ですから、割れていないか調べてください」などと言う。紙に二重に包んであるので、調べられない。しかたなく買ったが、ほんとに壊れていないか、家に帰ってあけてみるまで心配だった。どうやら、干支の辰の置物は無事だった。これで千円損しないで済んだ。
　夫の病気は治ったようだ。
　この日も池上彰氏の「世界を見よう」があった。見る暇がないので、ビデオに撮る、
　二日、夫は恒例の新年ゴルフに行った。私は一人でのんきに留守番をする。昨日の池上彰氏の番組を見て、なおも去年放送した彼の「現代史講義」が続いていたので、ビデオに撮る。さて、商店ももう仕事始めだろうから、近くのスーパーへ買い物に行く。ついでにコンビニでメール便を出した。大学時代の友人に私の小説を読んでもらおうと思い、同人誌と自費出版した本を送った。
　午後、同じ団地に住む息子が電話をかけてきた。
「パパ、いつ帰ってくるの？」
「今日はゴルフに行ったから、夕方まで帰らないよ」
「なんだ。困るじゃないか」
「車のこと？　仕様がないじゃない、パパの車なんだから」
　夫が車を使わないときは、息子が使っていいことになっているのだ。
「新年の二日にはパパはいつもゴルフで車を使っているじゃない。毎年のことでしょ」
　しかし、息子は本当に困っているらしかった。
　三日、午前中、夫はゴルフ練習場に行った、
　息子がやって来た。
「おれ、明日、医者へ行くんだから、午前中、車を貸してくれってパパに言っておいて」
「おまえ、病気なの？」見ると、手足がはれぼったくなっている。
「たいしたことないんでしょ」
「そんなんじゃないよ。四〇度も熱が出たんだ」
「え？　おまえ、四〇度も熱があるの？」
「急病診療所に行って、下がったけどよ。明日から病院、やっているだろ」
「そうだけど……どうしてそんな病気になったの？」
「猫にかまれた」
「まあ」息子は飼い猫を飼っている。もう十年も飼っている古猫だ。ご主人様に噛み付いて病気をうつすとは、なんという恩知らずの猫だろう。
「それなら、猫も犬猫病院につれていかないとね」
「猫は、自分の持っている菌だから、大丈夫なんだよ。でも、元気がないから、病院へつれていくけれど」
「じゃあ、パパに明日の午前中、車をあけておくよういっておくからね」

そして休み明けの四日。夫は仕方なしに家にいた。今日も池上氏の「現代史講義」があるのだが、夫が他の番組を見ているので、仕方なしにビデオに撮る。七日にも彼の「経済学講義」があるから、今年の年末年始は池上一色である。池上氏はさぞお金がたまっただろう。その上、私は彼の「戦争を考える」というＤＶＤまで買ったのだ。
「正一、早く帰ってこないかなあ」と夫はイライラしている。正一はなかなか帰ってこない。
「早く病院に行けばいいのに、もたもたしているんだから」
午後になって息子の携帯に電話したら、
「猫の病院に来てるんだよ」という返事である。
夕方になって、夫がジョギングに出かけた。戻ってきて、ファクシミリ電話機の掘り出し物があるという。暮れに壊れたファクシミリ電話機は、電話は出来るが、ファックスができない。ファクシミリの会社に電話すると、修理に三日から五日、費用は一万円近くかかるという。これでは買ったほうがましだ。この頃の機械は何でも新品を買ったほうが得なのだ。資源の無駄遣いと思うけれど。
「どうして買ってこなかったの？」
「車がなかった」
「じゃ、夕食食べて、二人で行きましょうか」
そそくさと食事を済ませ、二人で車で近くのディスカウントショップまで行く。
今度のファクシミリは、前のと違って、メーカー品だった。リボンも一緒に買って帰る。
新しい機械のため後でひどい目にあうことなど、予想もしていなかった。
五日。今日はカルチャーセンターの事始、小説教室の日だ。私は自分の小説、九人分、五六七枚を両手に持っていく。この次の小説教室の日までに読んできてもらい、合評してもらうためである。今日は他の人の合評の日なのだが、その前に先生が難しい話をするのでさっぱりわからなかった。何でも小説の文章の背後には、筋と物語を作る作者と、そのための文章を書く書き手と、その全体を見張る読者が、潜んでいるのだ、と言う。私の心の中に三人の別の人がいるなんて―まったくわからない。私は私だから書いているだけだ。
教室の後、皆でお茶会をするのだが、先生は具合悪いらしく、お茶会に出ないで帰ってしまわれた。
ところで、六日、朝、私は腰が重くて起きられなかった。ぎっくり腰らしい。五六七枚の紙が災いしたらしい。あいにく、この日、夫はゴルフに出かけて留守である。どうやってご飯を食べたものか。四つんばいに這って、執念でパン一枚食べた。トイレにも這って行った。昼食はうどんをなんとかこしらえて食べた。もうダウン。
寝ていたら夜になっていた。夫が帰ってきていた。食事の支度はしていない。ご飯も炊いてない。
「カレーライスでいい？」レトルトのご飯と、レトルトのカレー。夫に電子レンジとお湯で暖めてもらう。
夫はスープも作ってくれたが、私は手元がくるってこぼしてしまった。薬を飲もうと思っても、コップに水を入れられない。水をこぼしてしまう。我ながら情けない。

そして何よりも、歩けないのだ。お尻が重い。
七日も寝て暮らした。夫におんぶにだっこ。
八日日曜日。少し身体が楽になった。起きて食事作りなどしたが、まだ足元がふらつく。
今日は図書館に借りた本を返しに行く期限なので、夫に代わりに行ってもらう。
新しいファクシミリの子機に短縮ダイヤルを入れるのが難しく、覚えてしまえばなんでもないことなのに、苦労した。そのうえ、ファックスが来たのに、受ける方法が間違って、ファックスが消えてしまった。これで二度目だ。大事なファックスだったらどうしよう？　ためしに姉にファックスを送ってもらったら、ちゃんと受けられたのだけれど。
夕方は、「池上彰の戦争を考える」が届いたので、それを見る。ＤＶＤで二時間以上あった。その後は、ＮＨＫの大河ドラマ、「平清盛」を見る。九時からはまた池上さんの「経済学講義」である。ビデオに撮って寝るつもりだったが、眠れなかった。
ファックスの失敗……ほんとに大事なファックスだったらどうしよう……どうにもならない。困ったなあ。と、そのことと夫の胃癌（？）が気になって、ほとんど眠れなかった。胃の検査の結果は十二日頃に来る。本人よりも、私のほうが不安になっている。
さんざんなお正月だった。でも、十二日、夫の胃カメラをしてくれたクリニックより手紙が来て、夫のはただのポリープだったと判明した。やれやれ。
「後半年後にまた、胃カメラを撮ろう」と夫が言う。
「胃カメラは一年に一回でいいのよ」
「半年後にまたポリープができていたら、嫌じゃないか」夫はやっぱり心配だったのだ。

（５）春よ来い

今年（二〇一二年）は、各地で雪が多かった。北国では、屋根の雪下ろしが大変で、屋根に何メートルも積もった雪を除こうにも捨て場がない、という状況だったらしい。新潟県の中越地方に住んでいる友人に、お見舞いの電話を入れたら、大変だと言っている。

私は新潟から千葉に引っ越してもう半世紀近く経つ。両親とともに雪国新潟を棄ててきたのだ。千葉では雪はほとんど降らない。東京で雪が降っても、千葉ではまず、降らない。今年は二度ほど小雪が散った。小雪が散り……芝生に少し積もった。でも、その後、雨になって解けた。

雪の降らない、暖かい所に行きたい……というのは、両親の長い間の願いだった。もともと両親の故郷は新潟だったが、結婚後、東京に出てきていたのだ。それが、戦争で焼け出され、故郷に帰らざるをえず……不本意ながら新潟で暮らしていた。「暖かい所に行きたい」と、母は、呪文のように唱えていた。新潟の人たちは、東京志向が強い。村の理髪店のおかみさんも、「暖かい所に行きたい」と口癖のように言っていた。何も九州や四国に行きたいというのではない。東京方面に行きたいのだ。

高田市に住んでいた医者の伯父が、勤めていた大学病院を定年退職し、千葉は習志野に土地を買い、そこで開業した。だが、肝心の患者が来ない……。父が笑っていた。「千葉は暖かいから、病人がいないんだ。だから患者が来ないんだ」

そうだろうか？　千葉にも病人はいる。開業当初は閑古鳥の鳴いていた伯父の医院にも、おいおい、患者も来るようになった。まもなく、父も新潟の高校を定年退職する。父と同じに退職する同僚に、習志野の私立高校から就職口が舞い込んだ。その同僚は千葉には行かないと言う。「おれが行きたい」と父が立候補した。で、めでたし、めでたし。

父が千葉に来ても、母は新潟の公立高校をなかなか辞められなかった。私は、東京の大学に進学していたので、父と合流した。その後、母は、新潟の教育庁に勤め、文部省に来ることが多く、学閥を利用して千葉の教育庁にいた人に引いてもらい、千葉県の公立高校に首尾よく転職した。（母は、東京女子高等師範という所を卒業していた）で、私たち一家は、その後、ずっと千葉に住む。私もそこで結婚した。望み通り暖かい所に引っ越せた両親は、そこで天寿を全うした。

雪の降らないあこがれの土地。

人はなんで雪を好むのか？　東京や千葉の人たちは、わざわざ冬に雪国に旅行したりする。ここでもたまに雪が降ると、子供たちも喜んで雪だるまを作ったりする。人々は雪国の苦労を知らない。

さて池袋の長兄夫婦のことだが……とうとう山のようにあった着物を処分することになった。

兄嫁は、老衰で、動けなくなり、尿を垂れ流し……息子の彰浩が近くの病院に入院させた。が、これといった治療もなく、病院は置いてくれない。

「退院しろっていうんだよ」と電話で長兄が言う。耳の遠い長兄だが、電話は直接耳に当てて受け答えするので、割とスムースに話ができる。

「しかし、家にはベッドも置けないんだ。荷物がいっぱいで、ヘルパーさんにも来てもらえないし」

「着物を棄てたらどうですか？」
「もったいないんだ。千五百万円もしたんだよ」長兄の見立てでは千五百万円ということだが、実際はもっと高かっただろう。
「義姉さんは、着物なんか着ない人じゃないですか。なんでそんなに着物をたくさん、買ったの？」
「前は商売をやっていたから、お金があったんだな。買うのが趣味で、棄てるのはゴミでも嫌いなんだ。この前癌の手術をしたときは、呉服商から二百万円もの請求書が来たし」
「着もしない着物を家中いっぱいになるくらい買うって、それって病気じゃないですか。買い物依存症っていうんですよ」
「まあ、だけど……」
「とにかく、義姉さんのいないうちに業者に頼んで棄てることですね」
「もったいない……」
「だって、その着物、あったって、これから先、義姉さんが着物を着てどこかへ出かけるなんてことがあるんですか？　着物の値段より、池袋の土地の値段の方がずっと高いでしょう？　土地がもったいないじゃないですか」
「そうか……やっぱり棄てるしかないか」義兄はしぶしぶ業者を頼んだ。何十年も家中を占領していた義姉の荷物を棄てて……着物の山を棄てて見たら、畳も床も腐っていた。
「リフォームもしなければならないんだ。ベッドも買うよ。明後日は退院だから、江戸川区の方の介護施設に一ヵ月、入所してもらうんだ。お金はかかるが……池袋の介護施設は満杯で入れないんだよ。その後、介護認定も頼んで、ヘルパーさんに来てもらうよ」
「そうですよ。着物を棄てて、良かったですね」

　わが家のプリンタがとうとう壊れた。暮れから「部品の内部調整の必要な時期が近づいています」というエラーメッセージが出ていたが、ここへ来て、「部品の内部調整が必要です」というメッセージに替わって、印刷できなくなった。とうとう来たか。次に小説教室に提出する小説を印刷するときまで待ってみようと思っていたのだが。プリンタを買い換えよう。そして新しいプリンタで新しい小説を印刷しよう。新年に提出したのは、あまり評判良くなかったから、今度はがんばって書こう。しかし、この古いプリンタは、どうやってパソコンからアンインストールするのか？　Ｅ社に電話して聞いてみるか？……電話はお話中で通じない。やっとＥ社のホームページを探して、アンインストールの方法を調べてみる。その通りにやったら、削除できたが……後でインクを取り出そうとしたが、プリンタが動かなくてできなかった。アンインストールの前にインクを取り出すべきだった。失敗した。ま、いいか。市役所の粗大ゴミ係に電話して、粗大ゴミ（プリンタ）の申し込みをする。費用は三七〇円だそうだ。
　雨の日、夫に頼んで、近くの電器店まで車で連れて行ってもらう。プリンタもあまり大きいと、うちに置けない。しかし、パソコンには小さいのもあるが、プリンタはみな、大きいものばかりだ。その中で、どうやらうちに置けそうな割と小型のがあった。値段も、一万一千円と手頃だ。コピーもできる。それに決めた。
　家に持って帰って、インストールする。ＣＤからインストールはできたが、ＵＳＢケーブルの

差込口がどこにあるか、わからない。あちこち探したが、わからない。不親切なことに、取り扱い説明書にも書いてない。困っていたら、夫が差込口を見つけてくれた。だが、今度はパソコンがフリーズしてしまい、「プリンタを認識していません」という表示のまま、動かない。あれこれやって、やっと印刷できるようになった。うれしかった。

今度のプリンタは、スキャンとか、写真印刷とか、カラーコピーとか、予約コピーとか、いろいろなことができるらしい。複雑な機械だ。でも、当面はパソコンからの印刷とコピーだけにしておこう。コピーができるのは、便利だ。五円コピーをやっている店を探しにいかなくてもいい。

三月になった。天気はなかなか晴れず、ぐずついている。暖かくなったと思ったら、寒くなり、寒くなったと思ったら、暖かくなる。そうやって少しずつ春になっていく。

テレビは、去年の東日本大震災のことを放送している。去年は大変だった。今年は？　首都圏にも大地震が来るという。恐ろしい。

地震のない春よ、早く来い。